



うるま市  
地名散歩  
名嘉山 兼宏  
33

えす  
江洲 (イーシ)

おもろに謡われた果報国

江洲はうるま市の南西部に位置し、沖縄市と境界をなしている。江洲城跡からは勝連半島や周囲の離島、山原の山々、中城湾はるか知念半島が眺望できる。

- 江洲の杜々すく八つ股が寄りたち
- 上下見物する 寄りたち
- 又江洲頂ぐすく
- 又あてき漏原に
- 江洲の杜々すく
- 江洲の頂ぐすく
- 江洲は果報国

江洲を謡った『おもろさうじ』の一節である。大意は「江洲の城その周辺にたくさん高倉が建ち並び、各地から見物に集まる。江洲は果報な

国である」と解される。

江洲はこのように豊かな国、幸せな国として謡われ、願われていた。江洲の人々にとってはなんと胸のすく心躍る謡である。

江洲は江洲城はじめ、おもろ、また種取祭の伝説、数百年前から続いているという伝統の獅子舞など、かなり古い集落である。『球陽』によれば、江洲の集落ははじめ城原の地であったが、水の便が悪く、「多路喜原」に移動した。しかし、その後水の便が良くなったので再び元の地に移ったと記録されている(第十五巻・一七六一年)。

※多路喜原は、現在の小字名(原名)にはないが、江洲の下原あたりと推測される。

近年の江洲は区画整理事業が進められ、同時に沖縄市コザ方面、古謝・泡瀬方面とを結ぶ道路の開通により、沖縄市との境界がわからないくらいに新興地域として発展しつつある。

イン・イサ系地名について

イン系の地名として考えられるのは、沖縄県内の伊祖、伊佐、伊敷浜、隣県では、奄美大島の伊須、喜界島の伊砂などがある。浦添市の伊祖は、英租王の居城として知られる伊祖城跡が牧港を見下ろす高台にある。宜

野湾市の伊佐はかつて白砂が広がり、その美しさは、「眺めてもあかぬ伊佐の浜辺」と組踊「姉妹敵討」に詠まれている。南城市の久高島の伊敷浜は、白砂が広がる海浜である。

『角川地名大辞典(鹿児島県)』は、奄美大島の伊須について「奄美大島南部、伊須湾に臨む、イが強めの接頭語、スが砂であるから砂地の意」、また、伊砂は、「太平洋に面する海岸平野に位置する」とある。

これらのことからイン・イサ系の地名は海岸と関係する地名ということが出来る。

『具志川市誌』は、江洲の名の語源について、「洲、崎、祖」という文字は、海岸、瀬を表す文字であり、江洲、州崎、伊祖など海浜に位置する村落」としている。しかし、江洲が「海辺に位置する村落」としてその字句をそのまま解釈するのは、その地形、位置、歴史的な観点からいささか難点がある。

江洲の語源と意味

喜界島の伊砂や宜野湾市の伊佐などは文字通り砂浜海岸を指すものであるが、前述のように江洲について改めて考えてみたい。

『南島風土記(東恩納寛惇著)』は、「江洲は具志川の西南端にあり、…浦

添の伊祖等と同格の地名であろう。」と記している通り、伊祖、江洲も語源は同一と考えられる。

伊祖は、伊祖城下の石灰岩丘陵の上に位置し、江洲も集落成立当時は、江洲城下の城原の丘陵上にあつた。また、久米島町に磯田地名があるが、仲泊集落の北に連続する丘陵台地にある。

これらの観点からインの語源は海岸の岩山を意味する「磯」ではないか。これについて『地名語源辞典・山中襄太(校倉書房)』は、「断崖絶壁の岩山」また『古代地名語源辞典・楠原祐介編著』は、「つまり岩石海岸を読んだ地名。ただしイン地名は内陸に多く、これは古くは石の多い場所を一般的にインと呼んだためらしい」と記述している。

これからすると江洲は、地形、位置、景観などからして、語源は「磯」と考えられる。はじめ海岸の岩山や石の多い場所を言っていたが、それが時代を経て海岸の丘陵地や台地も指すようになった。

それが江洲の下原の海岸に打ち寄せてくる波を考え、海岸地名らしく『江』の文字と、場所を表す「洲」の文字を当て「江洲」とした。その意味は、「海岸の丘陵地にある村」といえるのではないか。

そして、イン(えす)→イーシ→イーシと転訛してきたのではないだろうか。